恐るべきダムの崩壊

誌名	水利科学
ISSN	00394858
著者名	荒川,秀俊
発行元	水利科学研究所
巻/号	5巻6号
掲載ページ	p. 180-186
発行年月	1962年2月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council Secretariat

恐るべきダムの崩壊

——五十里洪水の例——

荒川　秀俊

栃木県塩谷郡三依村（現在は藤原町に編入されている）の境界線は北西部は長く福島県と接し，東は那須郡高林村および塩原町に，南は栗山村および藤原町に接している。まことに重畳たる山岳地帯で，1,000メートルを越える山だけでも，芝草山，日向倉山，三依山，塩沢山，向山などが村内にあり，村境の屋根にも男鹿嶽，鹿ノ又岳，日留賀岳，白倉山，尾頭峠，二方鳥尾山，狸原山，安ガ森山，高瀬山，持丸山などが村をかこんで聳えたっている。

これらの山々の間をぬって，いくつもの溪流があり，それが集まって男鹿川をつくっている。男鹿川は県境の男鹿嶽に発して西流し，横川付近で南に折れ，帝釈山脈を横ぎるときいちじるしい峡谷を形成する。不動滝，上三依，中三依の辺だけはやや谷がひらけて，いくつかの部落がある。安ガ森山から発する入山沢は，その南で芥沢をあわせて蛇行し，五十里（いかり）（江戸から50里距てている地点）におよぶのである。それから下って海跡で西から来る湯西川と合流し，川治温泉にいたって本流の鬼怒川に合流するのである。

三依村の村名のおこりは，山間僻地で人口も少なく，身寄もないところから，互いに助けあって発展したいという願いをあらわしたもので，初めは身寄村と書いたということである。

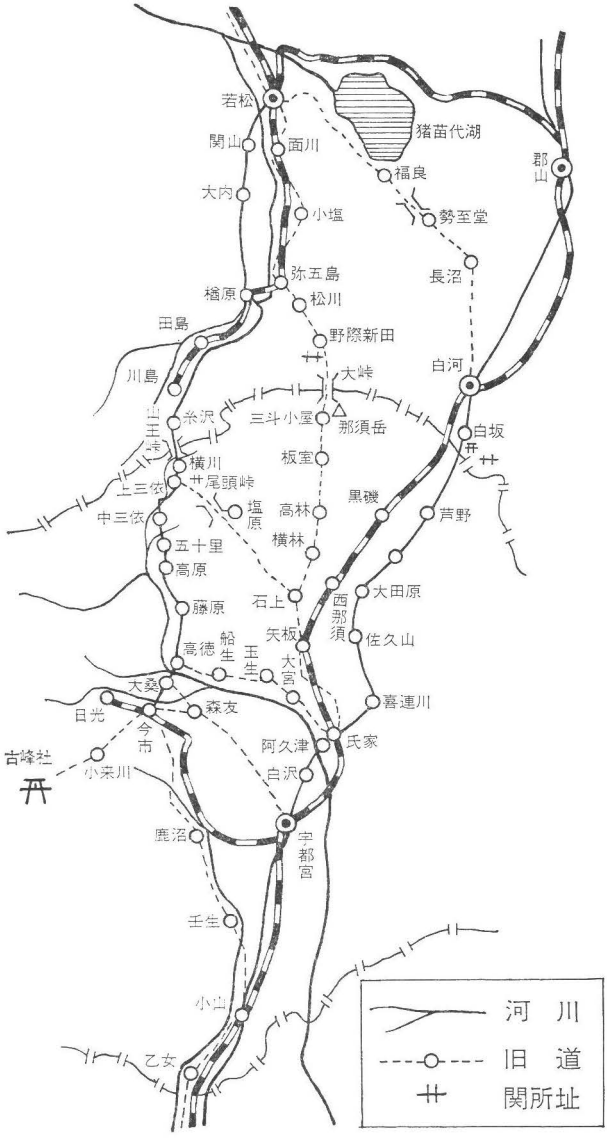
昔から当村は会津領に属し，永く会津藩主松平氏の領有するところであった。川に沿って県道があるが，これが昔から会津若松と江戸とをつなぐ会津西街道（第1図参照）を改修，拡張したものである。昭和に入って五十里ダム建設に際し，一部道路のつけかえをやり近代路線が開通し，会津から鬼怒川温泉に達するバスが通っている。

天和3年（この日付については後述する），栗山村西川小字葛老（かつろう）で葛老山に山津波がおこって，男鹿川（一名五十里川）の全流を遮断したため，前記の海跡という盆地に水が満ち，

『湖水長五十町，往還筋四拾七町，西川村方三拾七町，幅八丁より三拾七間迄御座候御事』（相定申扱証文之事　元禄十二年　五十里赤羽記録）

という大湖水ができた。このため川筋の三依村五十里と栗山村西川の部落は湖底に没し，部落民の大部分は上の屋敷というところに移転し，9家だけは船頭に転業し，

会津西街道の図



（注）　大島延次郎博士による.

（1） 布坂山にある番所の墨趾と“六左の墓”

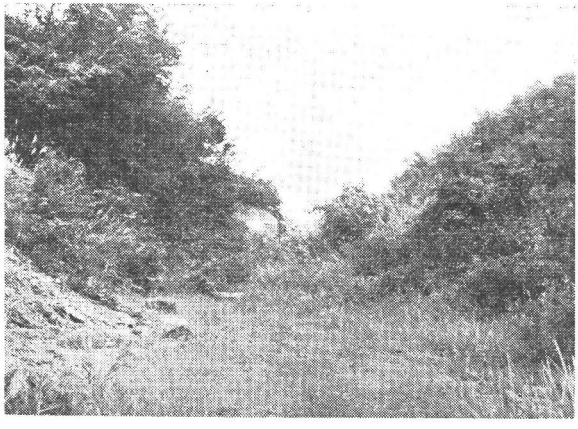
四十数年間，この湖上で4艘の小舟を操り，その駄賃で生計をたてていたということである。

土砂の崩壊によって堰き止められてできた堰止湖であるから，このダムが欠潰するおそれがあることは当然考えられることであった。このために会津藩では五十里番所の支配頭，高木六左衛門に命じて掘割をつくり，五十里湖の水を切り落そうとした。番所跡（いまは関所跡といわれているが．会津西街道の関所は山王峠の裾．横川にあったのである）はいま五十里字掘割にあって，布坂山（一名腹切山）にわずかな墨趾が残っている(写真(2)参照)。 ところが，掘割工事は難渋をきわめ，藩主より給せられた金子 3,000 両を使いはたしても完成することができなかったという（高橋英男氏の説)。高木六左衛門は失敗の責任を負って，切腹をして果てたが，『六左の墓』（写真(1)参照） は腹切山の番所跡の傍にある。 ところが，それから1年余りたった享保8年発卯8月10日（西暦1723年9月9日),海尻(うみじり)において欠潰し，ここに有名な五十里湖洪水がおこったのである。欠潰場所は掘割跡（写真(2)参照）よりも西側の葛老山の山崩れのあったところで起った。この欠潰してできた川の上にいまでは立派な橋が男鹿川の上にかかって観光名所となっている。『栃木県市町村誌』によると，

『海抜二百米の氾濫源をもつ湖水の水は，さながら夕立雲の様に』

なって下流におしだし，いわゆる鉄砲水となって，栗山村の土呂部，上栗山，大川筑や藤原村の鬼怒川沿いの部落や田畑を一呑みにし，舟生，大宮，絹島，羽黒などの沿岸地帯に氾濫した。宇都宮でさえ，3尺におよぶ出水で，下町の住民は八幡山に避難したほどの大洪水であった。これが有名な五十里洪水で，このときもと湖底になっていた五十里と西川の部落は干潟になって，海跡という名がつけられ，部落民は故旧

（2）掘　割　跡



の地にかえることができた。

星うつり，昭和になって，治水のためと多目的の水利のために，五十里ダムが建設され，五十里と西川の部落をつつむ海跡はふたたび人工の五十里湖の湖底に没してしまった。

また，下流における五十里洪水についての『栃木県市町村誌』栗山村の部の叙述によれば，

土呂部　五十里洪水で生き残ったもの僅か十余名という打撃をうけた。

上栗山　享保八年の洪水禍により殆んど全滅に瀕した。

大川筑　洪水により悉く流失の憂目を見ている。

西　川　天正三年の大地震により山崩れで川がせきとめられ，全村湖底に没したが，享保八年この湖水が押し流されて再び村が現出した。

『栃木県市町村誌』の絹島村の部によれば，

東は氏家，肘内より西は宇都宮，横川に至る東西六里。肘内，羽黒村中里に至る約二里の間は漫々たる大洪水と化し，深さは約三尺以上の浸水であったという。遺憾ながら被害の詳細な資料はないが，『氏家大谷川通御領分中流死者九百九十七人御座候』と古里郷土誌にある。河内郡絹島村上小倉では二十三人の流死者を数えているので，人畜，家財建物，田畑等の被害が如何に激甚であったか，ほぼ想像し得られるであろう。

田代善吉氏の大著『栃木県史』には延々31頁におよぶ『五十里洪水』の叙述が載っている。いま田代氏によって述べてみると，五十里湖の出現したのは，延宝4年か5年であるとし，享和8年8月8日からの降りつづく霖雨で増水し，地盤がゆるんで，一時に崩壊して奔流となって，鬼怒川沿岸の村落を洗いさったのであるという。

藤原の人々は，山のような濁流が押して来たときは，初め水とは思わず,『黒雲』であると思ったが，大洪水であったという。

その濁流は滔々として，下流の塩谷郡大宮村，氏家町，阿久津村，河内郡羽黒村，絹島村，田原村，古里村，平石村，瑞穂野村，本郷村，芳賀郡清原村，豊岡村，篠井村，豊郷村，横川村，宇都宮市などに浸入し，東は氏家，肘内から，西は宇都宮，横川にいたる東西約6里，肘内，中里にいたる約2里の間は漫々たる大湖水と化し，死傷者の数などは稟しい数にのぼったということである。

田代氏によれば，この鉄砲水の速度は誠に大きく，洪水波が来たのは，藤原が午後3時頃，大渡が午後4時頃，小林が午後5時頃，氏家が午後6時頃であったという。こういう不意の鉄砲水では，避難のすべはまったく見つからない。

五十里湖洪水の後，筏乗りをしていた多平，伝次郎の2人によって男鹿川と鬼怒川の合流点にある浅間山の岩間で温泉が発見された。五十里湖洪水のさい，山崩れで川筋が急に変わったところに見つかったのだという。これがいま有名な観光地になっている川治温泉の発見物語である。

*　　*　　*

さて五十里洪水のおこった日について,『栃木県市町村誌』に浜崎宗嶽氏らは享保8年（1723年）8月10日とし，高橋英男氏らは同年8月15日月明の夜としゃれている。洪水の起った日付においては大差がないのであるが，葛老山の山崩れのあった日付については『栃木県市町村誌』は天和2年（1682年）の夏，もしくは天和3年(1683年)の大風雨によるとし，高橋英男氏は寛文7年（1667年）の大風雨によるとしている。田代善吉氏は延宝4～5年頃（1676～77年頃）の地震のために起ったとしている。そうすると五十里湖は40～56年にわたって堰きとめられていたことになる。現地における掲示はすべて藤原町観光協会々長高橋英男氏（川治温泉ホテル社長）の説にもとづいて記述されている。

*　　*　　*

現地においては，数度にわたる火災，もしくは明治維新のさいの兵火によって，明治以前の古記録は失われ，ほとんど見当らない。したがって，これまで述べた五十里湖洪水に関する記事はほとんどいい伝えにもとづいて書かれたものである。

私はいま，手のおよぶかぎりの資料にもとづいて，五十里湖の生成およびその欠潰についての日付，原因，およびその災害について考察をこころみてみたい。

日本の名ある暴風雨および大地震に関する史料を検してみると，五十里湖が出現したのは，天和3年発亥（西暦1683年）であるように思われる。『武江年表』によれば，天和3年8月,『近世出水』とある。これを裏書きするものは，日本交通史の権威，下野史学会長大島延次郎博士の指摘された『三依郷絵図』の記事である。『三依郷絵図』は天保9年巡見使派遣に際して，巡見に便ならしめるため三依の道中を描き出して若

松役所に提出したものであるから，旅行の伴侶として恰好な絵図である。この図は三依郷の五十里から書き起されているが，それに

『天和三年日光御神料戸板山崩レテ水道ヲ塞キ大湖トナル。享保八年山麓ヨリ水抜ケテ陸トナリ再旧地ニ民家ヲ営ム』

とあるのが，決め手になる。宜しく五十里ダム周辺に掲げられた五十里湖観光案内の説明書は書き改めらるべきである。

＊　＊　＊

享保8年発卯8月7～10日の暴風雨については『月堂見聞集』『続談海』『因府年表』『金地院記録』『大聖寺藩史談』『八戸藩史稿』『福島県耶麻郡誌』『岩手県災異年表』『山形県災異年表』『新撰北海道史』などに記載されている。これらの諸書の記述を総合してみると，7日から10日までほぼ日本全国にわたって，雨が降りつづき，あまつさえ風もつのって，大風雨となり，ところどころ洪水があり，米作の損毛も数十万石におよんだ。そのなかでも，いまも世人に耳新らしいのが，いわゆる五十里湖の欠潰洪水である。

『去る八月八日，九日，奥筋，関東筋，大風洪水在之候内下野国と陸奥国の境内，福島の近所いかりと申所，在家三百軒余もあり。幅一里余に長さ三里程の処，六十三年以前洪水にて在家一軒も不残，漂流，其節水たたへて湖水の如し。其後山を開き，水を通さんとて，所々切候へ共，中々大水故，少々切候ままにて捨置候処に，当八日九日大風にて，其切口より此水切れ損じ，下野国へ流れ懸り，あぶくま川も水高く成り，宇津宮ざかい千軒とて富饒の所，高三万石計の地，一軒も不残，田畠永荒に成申候。此水故に関東筋洪水出申候。比水の出不申候所，殊の外の大風にて奥筋凡五十万石余も損亡仕候由』

（『月堂見聞集』近世風俗見聞集所収）

また同書の別のところに

『戸田山城守殿御領下野宇津宮，久世隠岐守殿御領上総国関宿洪水，南御領地にて五万石計損毛，人も四，五百人溺死仕候由』

と五十里湖洪水の余波を伝えている。

このように大きな水害があったため，『九月十日このほど国々水害かふぶりし地を，勘定の徒をして監視せしめらる』（徳川実紀）。その結果

『本年封内洪水アリ，田畑十八万五千九百石余損害アルヲ幕府ニ聞ス』（東藩史稿）

『十月不作ニ付，立毛見立ヲ命セラレシニ，草高一万九千五百六十四石余ノ旱損等ナリ』（前田氏家乗）

などと記されている史料が散見される。

＊　＊　＊

さて，ここに述べたのは，人造ダムの崩壊ではない。山崩れでできた堰止湖が，早

晩崩れる運命をもつものとして，住民から恐れられ，掘割をつくるべく努力され，用心されつづけていたものである。しかも，一度鉄砲水となって，鬼怒川を奔流すると，避難のすべなき大被害を生んだ。

近来，日本の多くの河川にできつつあるダムははたして安全なのであろうか。土木技術者の意見をたたくと，日本のダムが崩壊することは考えられないという。しかし，数十年前のことであるが，尾去沢ダムが崩壊したことがある。一昨年はフランスのマルパッセ・ダムが崩壊した。今年になって，韓国西南部で韓国最大の灌漑用ダムの一つの堤防が欠潰して，100人以上の住民が水死したと伝えられる。

日本のダムは建設省や農林省が喧しくて，安全係数をウント高くして設計・建設してあるという。それだから，豪雨の水圧ぐらいでは，日本のダムは壊れることはあるまい。しかし，ひとたび大地震が来たら，どうだろう。ダムは地面とともにゆり動かされるだろう。そのときの力学的振動に耐えるだけの強度はとってあるまい。そのとき，ダムが欠潰したら，どうなるだろう。それこそ『青天のへきれき』であろう。雨もないのに，雲のようにそびえたつ洪水が下流へドッと奔流するだろう。その洪水波は下流10キロメートル辺までは，軽く時速30キロメートルにも達するであろう。下流沿岸の人々には，この鉄砲水を避けるすべはまったくないし，そのときの水害の激甚さは思うだに膚に粟を生ずるばかりである。（気象研究所予報研究部長・理博）

（注　記）

延宝8年庚申は諸国とも稀に見る不作であった。越えて9年9月29日改元して天和元年となったが，この年も気候不順で，風水害が頻発し，穀価暴騰して餓死するものが多かった。翌天和2年にいたっては

『此とし畿内中国飢饉し，餓莩道にあまねかりしと聞えぬ』（徳川実紀）

といわれている。有名な磔茂左衛門の愁訴のあったのは天和元年のことである。

この両三年にわたる飢饉は近世における大きな飢饉の一つに数えられている。

（参考文献）

月堂見聞集（近世風俗見聞集所収）
大島延次郎，下野における会津文化の流布，下野史学第7号，昭和30年
栃木県町村会，栃木県市町村誌，昭和30年。
高橋英男，享保秘話・五十里湖洪水記，昭和29年。
浜崎宗嶽，鬼怒川・川治温泉の今昔，昭和30年。
依田鉄五郎，藤原村誌。
田代善吉，栃木県史（巻一）地理篇，下野史談会，昭和8年。